

〈書評〉

矢羽 勝幸 著

『加舎白雄傳』（郷土出版社刊）

村松 友次

大袈裟な標題を書いた。

はじめはこういう題で一文を草せよ、との事で、お引き受けした。

が、これには二つの誤算があった。

一つは本書の資料と考証のあまりの精密さ、膨大さであり、もう

一つは、己の体力、能力の衰えについての認識不足であった。

まことに恐縮であるが、この大著の中の第三章 発展期（明和八年四月——安永九年一月）の中の安永八年の章の中の、

「人恋し」句考——白雄の吉野山行——

だけについての「評」でお許し願いたい。

著者の膨大なお仕事の中で、この一章は私には最も刺激的であり、文学史的にも最重要な問題提起になっていると考えるからである。

さて、本題に入る。

加舎白雄の代表句は、江戸時代から

ひと恋し火とぼしころをさくらちる

であると言われて来た。一見ロマンチックな句である。

小西甚一は、

「人」は誰でもよろしいが、若い女性としておきますかな。あまり若くては困りますがね。……そのおもかげに散る花。……夕方の方のうす暗さに散るのは、ほのぼのとした恋しさを誘って美しい。『俳句——発生より現代まで——』
と、すっかり恋人を思う句ととっている。

はつきり恋人とまで言わないが、大岡信は、
憂愁のかげりをおびてどこかういいういし清新さ……（『折々のうた』）

と言ひ、俳諧研究の大家頼原退蔵は、

なんとなく人恋しさの思ひに堪へないで、ぼんやり夕闇の空を見上げると、風もないのに桜の花が二片三片、ほの白く散りかかるのであった。春の夕べの淡い感傷が、悩ましくもまた美しく描かれてゐる。（『俳句評釈』）

と言っている。

私はしかし、こういう甘い句がどうして白雄の代表句なのかと兼ねてから不審であった。その疑問は、この矢羽氏の大著『俳人加舎白雄傳』によって解消した。

白雄は安永元（一七七二）年三十五歳の時、吉野山に遊び、その紀行文を三次にわたってそれぞれ別の構成で、書いている。その三

種の「吉野紀行」にはどれにも「ひと恋し……」の句はない。

しかし、最近になって四番目と思われる『芳野山紀行』（の写し）が、小諸市小林葛古氏方に所蔵されていることを矢羽氏は発見した。

その『芳野山紀行』には、

……

御廟もる如意輪寺はともにこけむしつゝ
かへらじとかねておもへば梓ゆみなきかずにいる名をぞとゞ
むる

と、救世大士の御扉に矢の根もてかいつけたまひしときく楠氏の
潔きになミだこぼれて、

おもひやるむかしをけふの落華かな
遅日ゆづきて燈籠の辻福田なにがしがもとにやどる。

花とながめ桜と詠め日はくれぬ

ひと恋し火とぼしころをさくらちる

つぐの日なりけり、獺の観音、目止の地藏ぼさちおがミめぐり
て、

花の夢は獺にくはせじのちかひかな

峰の花螺貝ふく音もあらしかハ

けぬけの塔にて

九輪なき塔とはさらにさくら花

かミしもの蔵王堂に対す。

見よ華に錦の幌ふたつかな

……………（注②）……………

いのちあらばはるあらばまたはなのよしのやま

右芳野山記行 応索

東都春秋菴白雄印

とある。

また、「御廟もる……」から、「おもひやるむかしをけふの落華かな」までとほぼ同文が安永五年（吉野行脚の四年後）に書かれた『吉野紀行』中にもある。

また矢羽氏は次のように言う。

白雄は天明四（一七八四）年の春、房総を旅し、下総蕪里の玉斧方に宿っているが、玉斧の手控の中に「人恋し……」の句がある。このことによってこの句は、天明四年春までには完成していたこともわかる、

と。

つまりこれらの事実によって、この句は、

(1)まず、江戸や信濃でできた句ではなく、吉野の旅において楠正行ら古人を思つての句であること。

(2)次にこの句の初出が天明四（一七八四）年の春であるということ、すなわち吉野を旅した安永元（一七七二）年から十二年後の作であること。

の二点があきらかになったのである。

白雄はこの句を十年以上も温めつづけていたのである。

こう見て来ると、これは奥州平泉で義経主従の悲劇を、

夏草や兵 共が夢の跡^{つはものども}

と詠んだ芭蕉の心境を追っている、いやその作に対抗しようとする作であることが明白である。

江戸時代に隅田河畔向島の白髭神社境内にこの句碑を建てた人たちはこの句を芭蕉の平泉における義経追慕に対し、吉野に兵を挙げ、義に殉じた楠正行^{まさとけ}追慕の句と知っていたはずである。この句は花の散る夕暮に恋しい人を慕うというような甘い句では絶対にならないのである。

それにしてもこの認識、この発見は、専ら矢羽勝幸氏の草の根まで分けて捜す程の資料博搜によって成就された。しかし逆に矢羽氏が長野県小諸市の小林氏方に伝存する一写本を発見しなかったならば、あるいはその写本が何かの事故で煙滅でもしてしまっていたら、今もってこの一句は誤解の中に見られつづけることになったであらう。

大げさに言えばこれは文学史の書き換えを迫る一大事件なのである。

著者矢羽氏の所感を引いてこの稿を終ることにする。

この作品は異性に対する恋慕の情などではない。正行の決死の心情に感動した武士^{ものふ}白雄のはりつめた心情である。白雄は、生涯にわたりおよそ女性の美しさなどを作句の対象にしたことはなかった。この句ばかりをローマンなどと曲解することはゆるされない。

この作品は、白雄が古人たちの生き方を真摯に追慕した、寂寥感の漂う作であり、そこに蕉風復古者としての白雄の思想もうち出されているのである。

ちなみに

花とながめ桜と詠め日はくれぬ

の初案は『墨のにはひ』（親純・季杖編。安永元年刊）によると花とながめ桜とながめ夜^よに入りぬ。

であるが、「花」は遠山一帯の桜花、「桜」は近くの花をいう。

蕪村に、

花に遠くさくらに近し吉野川

という同じ吉野で詠んだ同趣の作がある。

（注1）本書の目次（大項目のみ）およびそのページ数を左に記す。

『加舎白雄伝』総ページ 一二五〇頁

序章

12 ページ

第一章 幼少期（元文三年—宝暦二年） 25 ページ

第二章 修業期（宝暦三年—明和八年三月） 141 ページ

第三章 発展期（明和八年四月—安永九年一月） 428 ページ

第四章 全盛期（安永九年二月—寛政三年） 532 ページ

第五章 白雄の諸相 90 ページ

白雄略年譜 16 ページ

（注2）……と省略した部分を示す。これによって、「ひと恋し火とぼしころを」の句が、吉野の歴史をはずれてのたとえば「ひそかに思いを寄せる女性への心情」などでないことが明白になるからである。

とく／＼の清水は杉のかれ葉ふミ行山ぞひの奥にて、そが
たはらに柴のいほりいとちいさく西上人のむかしをいまにそれ
さへ軒ばかたぶきてかすかなりけり。

岩がねや花の雪間を水つたふ

大滝、ミや滝など見ありきて桜木の宮に出る。

たゞ桜賽もたゞさくら（賽はムクヒマツルと読むか。村松）

よし野河の水上夏箕川をワたりて

鱗くむやさくら鮎もちる花も

かへるさなりけり、発心門を越るによし野太良といへる鳧鐘の
もにて、

白雲やひとツ鐘つく花のよし野

この日も同じ宿にとまりぬ。せみ滝のひゞきかすかに、象谷に
啼きゞすの声、華の夢見むたび寝なりけり。

花に寝て夢も匂はむまくらかな

さよの嵐梢にワたりてやちもとのはなびら曉の裾に白し。つた
ひきく雅章卿は花のなごりにさくら木あまた植させたまひし
と。ワレは桜がもとに老を噛て」

（東洋大学短期大学名誉教授 文学博士 俳誌「雪」主宰）